

「今を一生けん命」

く日本女子体そうを支えた池田敬子さんく

平成二十一（二〇〇九）年十月十六日、

「やりました！鶴見選手。つるみせんしゅ世界体そう選手権せんしゅけんの女子個人総合において四十三年ぶりの銅メダルをかくとくしました！」

このニュースをだれよりも喜び、満面の笑みを浮かべながら見ていた人がいる。池田敬子さん。彼女こそが、四十三年前のオリンピック銅メダリストであり、今なお日本はっぴんの体そう競技の発展のために力をつくしている人なのである。

敬子さんは広島県三原市佐木島さぎしま生まれ。小さいころから野山をかけまわる元気いっぱいの女の子だった。体そう競技との出会いは高校時代。とくいな鉄ぼうで思うぞんぶん、くるくるくると回っている姿をたまたま体そう部の先生が見つけた。すぐに体育館に連れて行かれ、目にしたものは、マットや平均台



の上で全身を使つてとんだりはねたりしている体そう部員たちの姿。（なんだ、これは？・・・）しばらく、ぽかんと口を開けて見つめていたが、引きよせられるように平きん台に歩み寄り、初めてふれたそのときから、体そうに夢中の毎日が始まったのだ。中でもとくいだったのは平きん台。はば十センチ、長さ五メートル、高さ一メートル二十センチ。バランスをくずしてほんの数ミリ身体がかたむいた

だけでも、落下してしまう。たえず落下のきょうふがつきまとう種目だ。しかし、敬子さんは、バレエシューズをはいたり、げたで歩いてみたり、ついにはげたをはいたまま平きん台の上でなわとびをしたりと様々な練習を考え出した。ひとつ技ができるようになると、また新しい技にちょう戦していく。明日の練習が待ち切れなかった。体そうづけの毎日を過ごし、体そうのできる大学へ進んだ。

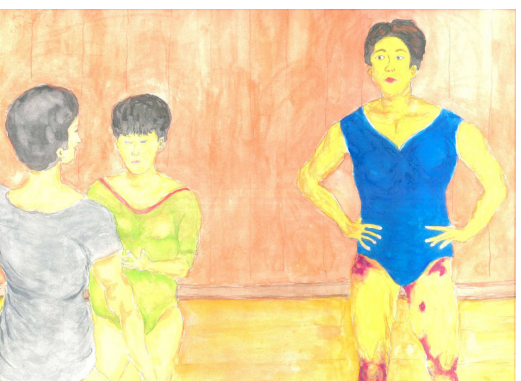
しかし、大学時代の練習はほとんど屋外。真冬の朝は、地面に十センチもあるしも柱が立っていても、す手にはだしで土の上での練習だった。手や足はしもやけだらけで血がにじむ。でも、練習を休んだ日はない。雪がつもれば「ラッキー！」と鉄ぼうの下にかき集めてマットのかわりにした。敬子さんにとってそんなかんきょうはへっちゃらだったのだ。

大学二年生の時のヘルシンキオリンピックでは、女子の体そうチームが参加できない中、男子体そうチームが多くメダルをかくとくした。日本でテレビちゅうけいを食い入るように見つめていた敬子さんは（いつかきつと私たちも・・・）と何度も何度もつぶやいていた。

そして大学四年生になると、初出場の世界体そう選手権の平きん台で金メダルにかがやくなど、すばらしい成せきをおさめていった。敬子さんをリーダーとして、日本の女子体そうはかくじつに世界のぶたいに立ちはじめたのだ。しかしまだ、オリンピックのぶたいでのメダルはないまま数年が過ぎていた。

結こんし子どもを育てながら選手としてかつやくする中、東京オリンピックまで、あと二年とせまり、初のメダルをめざしてきびしい合宿生活が始まった。二人のおさない子どもは近くの旅館にあずけ、朝は五時すぎに起きると合宿所から坂をかけおりて旅館に行き、おむつをせんたくする。当時はせんたくきなどなく、たらいでの手洗いだ。皮がむけている手のひらに、冷たい水がしみる。せんたくが終わるとすぐにまた合宿所にもどる。まだねているメンバーをおこして、六時から朝練習のはじまり。げんかいぎりぎりまであせを流す練習が、来る日も来る日も続く。全身あざだらけになっても、メンバーの思いはみな同じ。しかし、メダルという大きなプレッシャーの中、言い合いのけんかになることもめずらしくはなかった。

そんな冬のある夜。体はつかれはていながら、なかなかねむれずにいた。（本当にメダルがとれるのかな・・・）敬子さんは、冷たい冬の夜空にかがやく星を、一人ながめた。そんな時はいつも（結果を考えないこと。今を一生けん命やるだけ。）と、自分自身に言い聞かせるのだった。そんな合宿生活が、二年続いた。



昭和三十九（一九六四）年十月十日。さわやかな秋晴れのもと東京オリンピックが開幕した。いよいよ女子体そう団体戦。きょうこうチームが競う中、メダルをとるためには前半戦のきてい演技で三位以内に入り、そのままにげきる作戦だった。ところが・・・他国のチームが高得点を出す中、日本は小さなミスが重なって点がのびない。メンバー全員、そしてかん客も、かたずをのみ、とく点板を見る。「ああ・・・。」日本のおうえんでうめつくされた会場は、落たんのため息とともに、しんと静まりかえった。メダルが絶望的な状況になってしまったのだ。

「もう、だめだ。後半どんなにがんばっても追いつけるかどうか・・・。」
「あんなに期待されていたのに・・・。」

メンバー全員の目から、涙が流れた。一人涙をこらえ、こぶしをにぎりしめたままだまってうつむく敬子さん…。

しかし、大きく息をすい込むと、ぐっと顔をあげた。

「まだ、終わっていない。メダルはとれる。いいや。とる！」
いよいよ後半の勝負の演技「平きん台」。仲間の技が決まるたびに「エイヤッ！」と気合いのかけ声をかける。そして、最終演技者、敬子さん。ゆつくりと平きん台の前に立つ。ここまでの自分を支えてきたものが、腹にどっしりおさまっている。「大丈夫。それだけのことをしてきたじゃないか。今を一生けん命やるだけ。」不思議なほどに心が落ち着いていくのが分かった。まるでこきょうのおだやかな瀬戸内海の海面のように…。もう一度ゆつくり息を吸い込む。「よしっ！」大きく一步をふみ出すと、ダイナミックなジャンプとターン。ぴたりと決まった。「エイヤッ！」仲間の声がひびく。笑顔になったのが自分でもわかった。そしてフィニッシュは、この日のために温めてきた大技「片足前方宙返り」。マットにすいこまれるように着地が決まったしゅん間、「うおー！」会場から大かん声があがった。

結果は女子体そう団体三位、オリンピック初のメダルかくとく。五人のチームメートとともに、表しよう台の上に立つ敬子さん。胸元にはずしりと重い銅メダルが美しいかがやきをはなっていた。

大かんしゅうのかん声とはく手がひびく中、敬子さんはあふれてくる思いを胸に、じっとメダルを見つめた。

引退後も体そう競技はってんのために全力で力をつくし続けている敬子さん。今もこうはいの育成に一生けん命の毎日だ。



【参考文献】

池田敬子

「人生、逆立ち・宙返り」(二〇〇九)

小学館